

# 京都北郊の盆の行事

Bon Rituals in Northern Outskirts of Kyoto  
NAKAMURA Osamu

中村 治

## 序

盆とは旧暦7月15日の盂蘭盆会を中心とする前後数日の一連の行事のことで、7月13日の精霊迎えから7月16日の精霊送りまでのことをいうようであるが、もう少し広くとり、墓まいりから地蔵盆までを盆と理解する場合もある。ところで、新暦の7月というと、京都北郊の農村では、人は草取りに忙しく、盆の行事などしていらなかった。他方、新暦の8月は、水の管理以外、農作業があまりない時期である。そこで1ヶ月遅れの8月15日を中心とする前後数日を盆の時期と理解し、盆の行事を行うことが多くなったようである。ここでは、墓まいりから地蔵盆までを盆と理解し、京都とその北郊における盆の行事を見ることにより、地域間の結びつき、地域社会の変化について考えてみたい。

## 第1章 墓まいり

京都の町中では8月7日頃に墓掃除をし、仏具をみがくなどして、盆の準備を始め、盆の頃に各自が墓まいりを行い、丁稚、女中、子守などの奉公人が里帰りした8月16日に一族が集まることが多かったようである。

ところが京都の北郊には、8月上旬の決められた日に墓まいりを行い、しかもその墓まいりが、親族が集まるという点に関して、盆の行事の中心となっていた地域がある。墓まいりの日は、昔は近隣の村で結婚相手を選ぶことが多かったので、婚家の墓まいりにも生家のそれにも参加できるよ

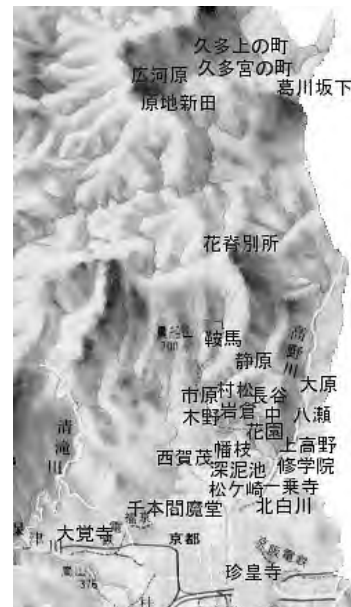


図1 京都とその北郊の盆の行事関係地名



写真1 墓掃除

左京区岩倉の惣墓。2011年7月31日早朝。

うにという配慮からか、1日が左京区松ヶ崎、2日が修学院、岩倉、岩倉村松、4日が静原、5日が岩倉長谷、岩倉中、6日が一乗寺、7日が八瀬、上高野、岩倉花園、5～7日が北白川、5日、7日、9日が北区西賀茂というようにずらしてあった（日を変えたところもある）。これらの地域ではその墓まいりの日までに、墓掃除の日が設定され、早朝に各家から人が出て、墓掃除、墓道の草刈りをするのである。

これらの地域のうち、左京区北白川、修学院、上高野、松ヶ崎、岩倉（岩倉・村松・長谷・中・花園を含む）、北区西賀茂では、墓まいりの日には早朝に墓へ行き、墓の両脇にシキミと色花を供え、墓前にカキの葉や葉ランを敷き、その上に精進物、野菜、果物を供え、線香、ロウソクに火をつけたうえで、墓に待機している僧を呼び、お経をあげてもらったところもある。中には一族そろって墓まいりをするところもある。そしてその後、昼あるいは夕方に生家に集まり、かしわのすき焼きを食べ、談笑する家が今でも見られる。その代わり、そのような家では、盆に一族が集まることはない。

左京区松ヶ崎、北区西賀茂の場合、盆に一族が集まらないのは、松ヶ崎が京都五山の送り火のうちの「妙法」、西賀茂が「船形」の送り火を行わなければならない、一族の接待などしておれないからであろう。花売りの「白川女」で有名であった左京区北白川の場合は、16日が京都へ仏花を売りに行く日であったからであろう。では左京区修学院、岩倉において、一族が盆よりもむしろ墓まいりに集まるようになったのはなぜか。

左京区修学院、岩倉は農村としての性格が強かったところであり、7月は田植え後の草取りの時期であった。そして草取りはおもに女性の仕事であった。日陰のない田で強い日差しを受け、先のがった稲の葉の間に顔を埋めて行うつらい草取りが終わる頃と重なる墓まいりが、女性の慰労会になっていたのであろう。そして盆に一族が集まらなかったのは、そうすれば、嫁が生家に戻りにくかったからであろう。

もっともこれらの地域でも、最近ではそのように日を固定すると、サラリーマンが墓まいりに参加できなくなるので、8月上旬の土日に墓まいりをする家が増えている。

## 第2章 精霊迎え

京都の町中では8月7日の六道珍皇寺(東山区)まいりが盆行事の始まりとされているようである。珍皇寺のあたりから東山へのぼったあたりに烏辺野の墓地がある。亡がらのほとんどがそこを通っ



写真2 墓まいりの時のお供え

カキの葉の上に果物、菓子、ホウズキ、青いカキ、流し団子などが供えられている。左京区岩倉の惣墓。2003年8月7日。



写真3 一族そろって墓まいり

左京区岩倉の惣墓。2010年8月7日。

て鳥辺野へ送られていったので、やがてそのあたりが「六道の辻」、つまり人間がその業の結果として輪廻する地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天という六つの世界（六道）において現世と他界の境目であると考えられるようになった。そして死者の霊が夏になると帰ってくるという考えが広まると、「せめて六道の辻までお迎えに行こう」ということになってきたようである。京都の人は珍皇寺へおまいりし、マキの小枝を買い、水塔婆に亡き人の名を記してもらい、冥土にまで響くという伝説のある鐘を撞き、六道で衆生を救済するという地藏尊の前でその水塔婆にマキを使って水をかける。そして水塔婆は寺に納めて寺で供養してもらうが、マキの小枝は家に持ち帰る<sup>(2)</sup>。

北区西賀茂では、精霊迎えには、千本閻魔堂（引接寺・上京区）へ8月7日～10日に行く。千本閻魔堂は、かつて鳥辺野とともに葬送の地として有名であった蓮台野（北区の船岡山の西あたり）へ葬送する時、衆生の妄夢をさますために鐘を撞いたと言われる寺である。精霊迎えの前の頃になると、千本閻魔堂からいつもはがきが来るので、千本閻魔堂にそれを持って行くと、塔婆が用意してある。その塔婆を六体地藏の前の流水に流して、迎え鐘を撞くと、精霊迎えをしたことになると考えられているようである。



写真4 亡くなった人の戒名と俗名を書いてもらった水塔婆に、地藏尊の前で高野マキの枝を使って水をかけて回向しているところ  
珍皇寺（東山区）。2008年8月7日。



写真5 地藏尊前で塔婆流し  
千本閻魔堂（上京区）。2007年8月9日。



写真6 千本閻魔堂（上京区）2007年8月9日。



写真7 迎え鐘  
千本閻魔堂（上京区）。2007年8月9日。

左京区一乗寺では、墓まいりをした後、寺へ水塔婆をもらいに行くことによって精霊を迎えたことになると考えられているようである。

珍皇寺や千本閻魔堂や一乗寺などの場合は、寺が精霊迎いの場所と考えられているようであるが、もしそうであるなら、珍皇寺や千本閻魔堂へ迎えに行った8月7日に精霊は家へ戻っているはずである。ところが実際には、精霊接待は8月13日から始める。また、珍皇寺で買って持って帰ったマキの枝を井戸に吊るしておく、13日に先祖の霊が戻ってくるともいう。それゆえ、珍皇寺や千本閻魔堂へ行くのは、精霊を迎えていっしょに家に帰るためではなく、盆の準備として墓掃除に行くようなものであろう。

左京区松ヶ崎の涌泉寺（日蓮宗）の檀家では、上京区出町の枳形にある花屋でハスの造花や麻幹などを買って持ち帰ることにより、精霊迎いをしたことになると説明されていた。盆の行事に使う品を主として売る盆市が精霊迎いの場所と考えられていたようである。

左京区鞍馬、上高野、岩倉花園、右京区嵯峨大覚寺門前には、迎え火を焚いて精霊を迎えるところも見られる。

左京区鞍馬では、13日夕方、杉葉を麻幹と稲わらで束ねたたいまつに用水路脇で火をつけ、用水路で小鉢に汲んだ水を家へ持ち帰り、精霊を迎える。

右京区嵯峨大覚寺付近では、13日夕方、近くの用水路脇で麻幹のたきぎを燃やし、その火でロウソクに火をつけ、そのロウソクを家まで持って入ることによって精霊を迎える。



写真8 迎え火  
たいまつに火をつけ、小鉢に水を汲んでいる。左京区鞍馬。2007年8月13日。



写真9 迎え火  
右京区嵯峨大覚寺近く。  
2007年8月13日。

左京区上高野では、13日夕方、麻幹を長さ10cm位に切りそろえて、数本を束ね、稲わらで全体を結わえて作ったたいまつに、かまどの火をつける。そして火をつけたたいまつを持ち、鉦をうち、戒名を唱えながら用水路の脇まで行く。そして用水路の脇にたいまつを置き、鉦をたたきながらお経を唱え、静かに拝んでから、先祖の霊を仏壇まで鉦をたたきながら導く。

このような精霊の迎え方を見ていると、精霊は、いつもは川あるいはその彼方に存在しており、盆にはその迎え火を目ざして訪れてくると考えられているようである。

他方、左京区岩倉花園では、13日夕方に家の仏壇で線香に火をつけ、それを持って墓近くの辻

まで先祖を迎えに行った。そこでその線香を挿し、持っていた別の線香に火をつけ、「ショウライ、ショウライ、これについてござれ」と唱え、家に戻る人もある。この場合は、墓が精霊のいつもの居場所と考えられているようである。



**写真 10 精霊迎え**  
用水路脇でたいまつを置き、鉦をたたいて、お経を唱え、精霊を家まで導く。左京区上高野。2002年8月13日。



**写真 11 墓地への辻で線香に火をつけているところ**  
左京区岩倉花園。2004年8月13日。

### 第3章 精霊の接待

精霊の接待の場所としては、座敷に仏壇とは別に盆棚を設けている家もあるが、多くの家は仏壇をきれいにし、仏壇に供えものを置いている。仏壇が盆棚になると考えてもよいであろう。そして仏壇にいろいろなものが供えられる。花としてはシキミと色花をいけ、位牌の前には、ハスの葉、あるいはサトイモの葉を敷いた上に、マキの小枝、ホウズキ、ミソハギ、イネの穂のほか、エダマメの枝、ササゲ（大角豆）、ミョウガ、ナス、キュウリ、ウリ、トウガラシ、サンドマメ、トマト、オクラ、サツマイモ、トウモロコシ、カボチャなどの夏野菜、モモ、カキ、ナシ、ブドウ、スイカ、メロンなどの果物を供える。

お供えする料理に関しては、いつ、何を出すのかは、それぞれの家で決まっているが、地域ごとに決まっているのではなさそうである。また、料理の仕方に関しても、「ゴマは仏の嫌い物」といって、ゴマを使わない家もあれば、ナスのゴマあえを供える家もある。かつては、よその家でどのようなことが行われているのかをあまり詮索することなく、その家で行われているやり方を受け継ぐ



**写真 12 仏壇前の供え物**  
キュウリの馬、ナスビの牛が見られるが、これらは京都の北郊では珍しい。左京区岩倉。2003年8月13日。

ことが多かったからであろう。

その他のことに関しては、地域による特徴が出てくることもある。たとえば、接待の期間には地域性がある。左京区岩倉、岩倉村松、岩倉長谷には（精霊が）「一夜泊まりで流された」ということばがあり、それらの地域では14日と15日だけ精霊を接待して、15日に送り出す家が多い。左京区八瀬では、14日夕方にお飾りをして、僧にまいってもらい、15日早朝には送り出す。

左京区鞍馬、静原、大原、岩倉花園、修学院では13日から15日まで接待する家が多いようである。なお、大原では、家から出た者が14日夕方に集まり、お供えのごはんに麻幹の箸を一膳ずつさす。これは先祖と食事を共にするという意味であろう。

左京区岩倉木野、北区深泥池、西賀茂、右京区嵯峨では13日から16日まで接待する家が多いようである。

なお、嵯峨の大覚寺付近では、13日から16日までが接待期間であるが、そのうち15日は、接待を全くしない。その日は、「お精霊さんが信濃の善光寺へおまいりに行くので、接待する必要がない」というのである。

なおまた、盆は仏教の行事と思われるかもしれないが、神道でも精霊の接待を行うところがある。たとえば左京区岩倉木野は、集落全体で神道を奉じているが、精霊の接待を行っている。もっとも、岩倉木野は、明治時代初めに集落全体で仏教から神道へ改宗したところであり、以前の習慣を引き継いでいるだけなのであろう。

#### 第4章 新仏（新精霊）の接待

新仏（新精霊）のまつりかたにも地域性がある。「新仏はご先祖さんの仲間になかなか入りづらいだろうから」と言って、別の盆棚を設け、13段のはしごをかけ、そこにまつる家がある。



写真13 お供えのごはんに麻幹の箸をたてたところ  
左京区大原野村。2007年8月14日。



写真14 神道の場合の精霊接待  
シキミの代わりにサカキが飾ってある。  
左京区岩倉木野。2004年8月15日。



写真15 新仏用のお供え  
左京区岩倉村松。2007年8月14日。

北区深泥池では、新仏が出た家の前に村人が集まり、善光寺和讃を唱える。この場合は、新仏の霊を村人全体で慰めようというのであろう。

## 第5章 供え物の数

供えものは、多くの家では仏壇の前に1セットだけ供えるが、2セット供える家、3セット供える家、4セット供える家、6セット供える家もある。

供え物を2セット供えるという左京区鞍馬では、「1セットは先祖のお精霊さん、1セットは無縁さん<sup>(3)</sup>のためのもの」であるという。「無縁さん」とは、まつり手のない靈魂、すなわち無縁の精霊のことであろう。

3セット供えるところでは、1セットは先祖のためであり、1セットは、本来は他の家でまつべき精霊、たとえば嫁の家の精霊のためのものであり、もう1セットは無縁さんのためのものであると説明する人もいる。

4セット供えるところでは、3セット供えるところの説明に、仏のためのセットが加わっていると説明する人もいる。

左京区花脊別所や静原や大原では、仏壇の前に供え物を置くほか、縁側に餅舟のようなものと提灯をぶらさげ、餅舟のようなものに「ホウカイさん」（無縁さん）用の供え物を置く。提灯は精霊がやってくる時の目印であるという。

花脊別所で仏壇前の供え物について説明を求めると、カキの葉に載せた供え物は、先祖が連れてきた友だちのためのものであるという。そう考えると、別所のまつり方は、供え物3セット、あるいは「ホウカイさん」の分も含めて4セットの例と考えることもできるであろう。

このほかに6セットを供える家がある。「6」ですべての霊を表していると考えられることもできるが、2つずつの3セットを意味しているのかもしれない。



写真16 新仏が出た家の前に村人が集まり、善光寺和讃を唱えているところ  
北区深泥池。2008年8月14日。



写真17 供え物2セット  
左京区広河原。2016年8月15日。



写真18 供え物3セット  
(上に2セット、右下に1セット)  
左京区八瀬。2007年8月14日。



写真19 上に3セット、左下に1セットの  
供え物がある  
左京区岩倉。2004年8月14日。



写真20 軒下の提灯と「ホウカイさん」へ  
の供え物  
右奥には仏壇前に供え物がある。  
左京区花脊別所。2016年8月15日。



写真21 仏壇前の供え物  
2セットのほか、左端にカキの葉に載った供え  
物がある。左京区花脊別所。2016年8月15日。



写真22 盆棚に供え物が6セット供えられている  
左京区松ヶ崎。2005年8月13日。

なお、昔は、たいていの場合、墓まいりの時の供え物を墓に残し、精霊送りの時には、精霊接待の供え物を川に流した。それは死者の霊のためのものだから、食べてはならないとされていたようである。しかし今では環境に配慮して、あるいは「サルが食べるから」(左京区久多)というので、墓まいりの時には、供え物を家に持ち帰り、精霊送りの時には、供え物を一般ごみとは別に集め、処理してもらっている。

これらの例を見ていると、供え物が2セット以上ある場合、そのうちの1セットは「無縁さん」(「餓鬼さん」)のためのものと意識されているようである。大半の家では供え物が1セットしかないが、そのような家では「無縁さん」(「餓鬼さん」)のための施しをしていないのかということ、そうではない。一般家庭での施しとは別に、寺では盆や彼岸に「施餓鬼」と呼ばれる法会が行われ、たいていの家の人はそのに参加するのである。



## 第6章 精霊送り

精霊送りに関しては、精霊を送る場所は川岸であったというところが多い。たとえば左京区八瀬では八瀬川，上高野では用水路，山端では高野川，修学院では音羽川，一乗寺では太田川と呼ばれる用水路，静原では静原川，鞍馬では鞍馬川，あるいは鞍馬川から取水した用水路，花脊原地では大堰川，北区深泥池では、かつては池，あるいは池から流れ出る川，西賀茂では西方寺の池，右京区嵯峨大覚寺では用水路などで送った。

花脊原地では、いくつもの麻幹のたいまつを用意して、家の前でそれに火をつけ、盆棚に供えていた物を持って大堰川の川岸へ向かうのであるが、その道中のところどころにたいまつを置いていく。川岸に着くと、川原の石を寄せ集めて台を造り、その上に供え物を置き、飾り付けをして、精霊を送る。

左京区鞍馬では、杉葉を麻幹と稲わらで束ねたたいまつに家の前で火をつけて、川まで行き、小鉢に入れて仏前に供えていた水を川に流し、精霊を送る。

左京区八瀬では、15日朝にひじきとおあげを炊いたもの、白ごはん、しきみ1本を持って八瀬川の川原に行き、石を5個とか7個積みあげ、線香に火をつけて精霊を送る。川の中で送るのは、あの世へ「早く戻れるように」という配慮からであるという。

左京区久多や滋賀県高島市朽木の針畑など安曇川水系でも、花脊原地や八瀬と似た仕方で精霊を送る。川原に石で台を造ることは隣接する左京区花脊原地と似ており、その台の上に石を積み上げることは左京区八瀬と似ているが、久多では六体の川地藏、朽木の針畑や大津市葛川坂下町では六体の川原仏をこしらえ、その前で精霊を送るということが異なっている。



写真 23 精霊送り

写真中央右に供え物を置いた石の台が見られる。左京区花脊原地。2007年8月15日。



写真 24 精霊送り

ごはんは大きいおにぎりにする。左京区八瀬。2007年8月15日早朝。



写真 25 川原仏

15日に飾り付けをする。大津市葛川坂下。2012年8月15日。



写真26 川地蔵<sup>(4)</sup>  
新しい花が飾ってある。左京区久多宮の町。  
2009年8月15日朝。



写真27 川地蔵  
盆棚にお供えしてあったものが供えられている。左京区久多上の町。2012年8月15日朝。



写真28 橋のたもとでの精霊送り  
麻幹のたいまつの上に線香を挿し、その線香に火をつけ、その火が消えるまで、お経を唱えている。左京区岩倉。2003年8月15日。



写真29 地蔵尊の前で精霊送り  
年配の人が中心となっている。  
左京区一乗寺。2009年8月16日。



写真30 墓地まで精霊を送り、火をつけてきた線香を入口に置いてある  
右下にはろうソクも見える。左京区大原の墓地。2016年8月15日朝。

他方、精霊を地藏尊の前で送る、墓へ送るといふところもたくさんある。左京区岩倉長谷では、棚経の時に書いてもらった塔婆をもって精霊を墓まで送る人が多い。

精霊の居場所は、川の彼方のどこか、あるいは墓と考えられていることが多いようである。

## 第7章 盆踊り

盆踊りは、先祖の霊を歓待し、慰め、送るために、村という共同体によって行われた行事であった。左京区市原野のハモハ踊り、松ヶ崎の題目踊り、北区西賀茂の六斎念仏などは、その代表的なものといってよいであろう。

ところが盆踊りには往生願いや慰霊などの念仏系を脱して、次第に風流化していったものもある。たとえば左京区修学院や北区上賀茂において紅葉音頭に合わせて踊られている「さし踊り」がそれにあたるようである<sup>(5)</sup>。紅葉音頭は、江戸時代のはやり唄や歌舞伎の台詞などから作詞し、節をつけたものと言われ、静かで素朴なものが多くある。

また『山城四季物語』(1674年)によると、旧暦7月15日・16日に左京区岩倉の大雲寺観音堂前、長谷八幡などで、人々が「南無阿弥陀仏」に節をつける念仏踊りを踊り、その後、村内の新仏のある家々を訪ねて踊ったのであるが、その際、<sup>(6)</sup> 灯籠を頭にいただいて踊ったというので、これも風流化した盆踊りの一つであったのであろう。

さて、左京区岩倉や岩倉長谷における灯籠踊りに関する記述は、幕末の『近世風俗誌』(1853年)まで、さまざまな地誌類に記されている。そしてその後も灯籠踊りは、左京区久多の花笠踊り、八瀬の赦免地踊り(盆踊りとして踊られるのではなく、江戸の老中秋元喬知への感謝の気持ちの表現として10月に踊られる)として残っている。しかし岩倉や岩倉長谷においては、灯籠踊りに関する記述がその後消えてしまった。そして岩倉や岩倉長谷をはじめ、京都北郊のほとんどの地域において、盆踊りというと、江州音頭ばかりになってしまったのである。紅葉音頭で有名な左京区修学



写真31 ハモハ踊り

新精霊のいる家族は戒名を記した水塔婆を腰帯に挿して踊る。精霊を送るように団扇を振上げて踊るので、慰霊とともに精霊送りを兼ねているのであろう。左京区市原。2008年8月16日。



写真32 赦免地踊り(灯籠踊り)

左京区八瀬天満宮。中央は音頭とり。昭和12年(1937)。

院でも、昭和12年(1937)頃までは紅葉音頭に合わせて踊っていたが、昭和17年(1942)頃になると、江州音頭に合わせて踊るようになっていた。

また、盆踊りを踊る時も変わっていったようである。近年、北区西賀茂では、8月16日の夕方の4時頃、送り団子を半紙に包んでお供えして、西方寺の池のほとりで精霊を送る。そしてその後、五山の送り火の一つである船形の送り火を燃やすことにとりかかる。送り火が終わると、急いで家に戻り、行水を済ませ、少し食べて、9時半頃に



写真33 六斎念仏

西方寺。北区西賀茂。1960年頃。

西方寺へ集まり、六斎念仏を踊り、その後、江州音頭に合わせて踊る。もし盆踊りが先祖の霊を歓待し、慰め、送るために、村という共同体によって行う行事であるなら、先祖の霊を送ってから踊るとするのは、妙な話である。

左京区松ヶ崎でも、北区西賀茂と同様、松ヶ崎の人は16日に精霊を送ってから、五山の送り火の一つである妙法の送り火をし、その後、涌泉寺に集まり、「南無妙法蓮華經」と唱えて静かに「題目踊り」を踊り、その後には「さし踊り」と呼ばれる踊りを踊る。15日にも「題目踊り」を踊り、その後には「さし踊り」と呼ばれる踊りを踊るので、その時にはまだ先祖の霊がいると考えてよいが、16日の送り火の後に踊る時には、先祖の霊はもういないはずである。

これは、盆踊りが風流化していったこと、そして江州音頭にとってかわられていったことと関係しているのではないであろうか。

江州音頭は、もともと山伏や修験者が神社・仏閣の祭りの中で神仏に告げる文である祭文から発展したものであり、幕末に八日市の板前西沢寅吉(1809年～1890年)が、祭文語りの名人である桜川雛山に弟子入りして本格的に祭文語りを修行し、祭文語りに念仏踊り、歌念仏も採り入れ、人気を博したという。その西沢寅吉(初代桜川大龍)の作ったような音頭が、近江一帯から京都、大阪、奈良などにも伝わり、やがて旧国名を冠して江州音頭という呼び名で定着したようである。

さて、この江州音頭による盆踊りが、どういう経路によるのかはわからないが、京都北郊にも伝わってきた。音頭とりをしていた左京区岩倉木野の山下正美氏によると、京都北郊各地の江州音頭の様子は次のようになる。

「盆踊りは、8月14日の〈左京区〉木野(昔の京福電鉄木野駅前の番小屋広場)をかわきりに、地藏盆ぐらいまで、毎日どこかで踊りがあった。岩倉では実相院前、心光院前、長谷では八幡神社、花園では立石の西、修学院では離宮前、幡枝では円通寺前の民家の庭、市原では小学校、静原では静原神社、鞍馬では大門の坂をおりたあたり、〈北区〉深泥池では池の南西隅近くの辻、上賀茂神社なんか踊りの場所。

修学院、上賀茂などでは紅葉音頭で踊ってから、江州音頭で踊ったはず<sup>(8)</sup>。おそらく大正時代ぐらいまでは岩倉でも紅葉音頭で踊ってから、江州音頭で踊ったのだろう。

踊り方には地域差があった。合いの手は、江州は一つ。岩倉は二つ。鞍馬も二つ。同じ二つの合

いの手でも、鞍馬ではテンポが遅かった。八瀬と大原も岩倉と違った。また、女の人の前掛けが違った。深泥池は衣装を統一していて、しかも踊りがうまかった。

踊り終わるのは、終戦前で、夜の12時。戦後は、夜の10時。それでも巡査に酒を飲ませたりして、遅くまで踊っていた。市原が12時頃に終わると、その頃から静原で踊りが始まり、朝まで踊っていた」(2004年談)。

左京区八瀬の人も、戦時中と戦後しばらく、大原、黒谷青龍寺、大津市坂本まで江州音頭を踊りに行った。「坂本からの帰りには、裾をまくりあげ、山を登って、大原の人などといっしょに大人数で帰ってきた<sup>(9)</sup>」という。

京都北郊では、盆踊りといえば江州音頭という状況に戦前になっていたようであるが、それはどうしてなのか。山下氏の話によると、音頭取りを招く時に、どの音頭取りを招くかで寄付の集まり方が違ったという。江州音頭の音頭取りの間で差が出ただけでなく、紅葉音頭と江州音頭の間でも差が出たのではないであろうか。紅葉音頭は「都から野遊びに来た人をもてなすためのものであった」という。紅葉音頭は、村の人たちが楽しむためのものとしての要素が、江州音頭と比べると、少なかったのかもしれない。灯籠踊り、紅葉音頭がすたれ、江州音頭がさかんになっていったことには、村人たちの好みが反映していたのではないであろうか。

江州音頭による盆踊りは、戦前では若い男女の交流の場となり、さかんに行われた。戦前の洛北には電燈などほとんどなかったので、夜になると、とても暗かった。男の人は、気に入った女の子を見つけると、その人の後ろにぴったりくっついて踊った。するとその女の子は、「この人はわたしに気があるのやろうか」と思って、心ときめかせたという。

## 第8章 地藏盆

さて、盆の行事の締めくくりは地藏盆であると言えるであろう。地藏菩薩は地獄にいる子どもを鬼から守るといふ信仰により、地藏の縁日である8月24日とその前日に子どものための行事を行う習慣ができたのが、地藏盆である。「地藏さん」(とは言っても京都近郊の場合は、近世の墓石で、阿弥陀如来が彫られている場合が多い)の前の空き地に敷物が敷かれ、そこで子どもは一日中遊びほうけた。子どもが遊びほうけるのはいつもと同じであったが、この日ばかりは大人が幻燈、紙芝居、人形劇、のど自慢大会、福引などをして遊んでくれたのが、いつもと異なっていたのである。

しかし京都北郊において地藏盆が子ども中心の行事となってきたのは、それほど遠い昔からではない。地藏盆は、京都北郊では念仏講と呼ばれる講の人たちが中心となって行った行事であり、大念仏数珠繰り、ご詠歌詠唱が行われたのである。

そのような地藏盆に子どもがたくさん集



写真 34 大念仏数珠繰り  
恵光寺。左京区市原。2008年8月16日。



**写真 35 地藏盆**  
左京区八瀬の念仏堂前。子どもの姿が見られない。昭和52年（1977）。



**写真 36 地藏盆**  
子ども中心の行事になっている。左京区岩倉幡枝。昭和40年（1965）頃。

まったのは、お供えものを分けてもらえたからであろう。ところが子どもを楽しませることを意図した行事がやがて行われるようになってきたようである。

子どもを楽しませる行事として地藏盆を行うということは、京都の町中では戦前から行われていたが、それが京都北郊に広まったのは、戦後になってからのことであり、たとえば左京区岩倉長谷では昭和30年代、静原では昭和40年代末のことであった。

## 結び

京都と京都北郊における盆の行事を調べれば、京都北郊における地域の特性、地域間の結びつき具合などがわかるかもしれないと思っていたが、隣接した地域の盆の行事は必ずしも似てはなかった。同一地域内においても宗派の違いなどにより、盆の行事の行い方はずいぶん異なっていた。それでも京都北郊の盆の行事に関して、いくつかのことを言えるであろう。

一つは、一族の者が墓まいりの日に集まる傾向が強かった地域と、盆に集まる傾向が強かった地域があるように思われることである。一族の者が墓まいりの日に集まる傾向が強かったのは、左京区北白川、一乗寺、修学院、上高野、岩倉、岩倉花園、岩倉長谷、松ヶ崎、北区深泥池、西賀茂であり、盆に集まる傾向が強かったのは左京区大原、静原、鞍馬、下鴨、北区上賀茂などである。大原、静原では、墓まいりの日は決まっているが、一族の者が集まったのは盆である。鞍馬、上賀茂、嵯峨では、墓まいりの期間が指定され、その間に一族の者めいめいが勝手に墓まいりを済ませ、盆に集まった。八瀬、岩倉幡枝、木野などでは、一族の者が墓まいりに集まる家と盆に集まる家が混在していたように思われる。

北区西賀茂、左京区松ヶ崎の場合、盆に一族の者が集まらないのは、それぞれの地域が「船形」、「妙法」という五山の送り火を行わなければならない、一族の者の接待などしておれなかったからであろう。左京区北白川の場合は、16日が、白川女が京へ仏花を売りに行く日であったので、一族の接待をしておれなかったからであろう。では、左京区一乗寺、修学院、上高野、岩倉、北区深泥池にはそのような行事が盆にないのに、盆よりもむしろ墓まいりに一族の者が集まるようになったのはなぜか。

左京区修学院，岩倉は農村としての性格が強いところであった。そのため，つらい仕事である草取りが終わる時期と重なる墓まいりが，慰労会の意味を持っており，墓まいりの後に一族の者が集まるようになったのであろう。他方，田のない左京区鞍馬はもちろんのこと，大原，静原も山村的性格が強く，田仕事が占める割合が比較的小さかったのであろう。

しかしそれだけでは，北区上賀茂，左京区下鴨などにおいて盆に一族が集まる傾向が強かったことを説明できない。8月16日は「やぶ入り」の日であり，小僧，丁稚，女中，子守などの奉公人が，新しい着物や履物，給金や小づかいをもらって里帰りした日である。上賀茂，下鴨などは，上高野，岩倉，深泥池などより嫁や奉公人を介しての京都との結びつきが強く，嫁や奉公に出ていた人たちが帰りやすい盆に一族の者が集まるようになったと考えられる。

また，精霊を接待する期間の長短にも傾向があることがわかる。たとえば左京区大原では，お供えを大原川へ流しに行くのは15日であるが，たいまつに線香を挿して精霊を大原川まで送りに行くのは，14日夕方という家もある。八瀬では15日早朝に精霊を送り，供え物を流す。岩倉では供え物を流すのは15日であるが，精霊を送るのは16日という家がある。一乗寺でも，供え物を流すのは15日であるが，精霊は16日に地藏尊の前で送るという家がある。五山の送り火が16日であるように，精霊送りの日は16日であったと思われるのに，なぜ15日に精霊を送ったり，供え物を流したりするのであろうか。

一つ考えられることは，16日が藪入りの日であり，奉公人のみならず，若嫁も生家に戻ったということである。しかも岩倉や八瀬の場合，若嫁は1日だけ生家に戻ったのではない。おそらく，田の水の管理以外，稲作に関してはこれと違ってしなければならぬことがなかった時期に合わせたことであったと思われるが，「洗濯」あるいは「藪入り」と称して，若嫁はその日から子どもを連れて生家へ1，2週間～1ヶ月ほど洗濯をするために戻ることが多かったのである。ところが16日まで精霊の接待をしていると，若嫁のやぶ入りがそれだけ遅れてしまう。そのため，若嫁への配慮から，15日に供え物を流し，精霊も送ってしまう，あるいは精霊送りだけは年寄が16日に行うようになったのであろう。

京都北郊は，盆踊りが盛大に行われた地域であったように思われる。それは農作業が比較的少なかった8月が，若い男女の交流の時期となっていたからであろう。盆は先祖の霊をまつための期間であったとともに，この世にいる人たちの楽しみの期間でもあったと思われる。

京都北郊には，昭和初期から兼業化が進んだところが多くある。その傾向が，高度成長期の昭和30年代中ごろから麦を作らなくなったこと，宅地化によって農地が少なくなったことによってさらにすすみ，今では農業をしている家でも2，3反しかしていないところが多くなっている。しかも農作業の機械化が進み，化学肥料，農薬を散布するようになって，農作業がかつてほど苦しいものではなくなっている。そのため，農業が盛んであった地域でも，墓まいりが慰労会の意味を持たなくなっている。また，墓まいりの日を固定してしまうと，墓まいりの日が週日にあたるが多くなってしまいが，サラリーマンがほとんどである現代人は参加できなくなることが多くなるので，墓まいりの日を8月7日前後の土日に設定するようになってきている。しかも，サラリーマンは転勤によって各地に移り住むようになり，墓まいりや盆であるからといって，ふるさとへ戻ることは，容易ではなくなってきている。また，仮に休みをとれたとしても，それはサラリーマンにとって貴重

な休暇であり、ふるさとへ戻ることも、旅行に費やされることが多くなってきた。さらに、都会へ出た子どもたちが、それぞれ都会で墓を持つようになると、ふるさとへ戻ることはさらに少なくなっている。こうして墓まいりも盆もかつてのにぎわいを失っている。

また、精霊の接待にしても、核家族化が進み、若い世代は年寄世代が行っていたことを見ていないので、年寄世代が亡くなると、かりに精霊の接待をする意志を持っていても、何をしてよいのかわからなくなり、何かの本に書いてあるマニュアル通り、あるいは寺で教えられた通りにすることになって、各家に伝承されてきた接待の仕方が消えていきつつある。

さらに、地域共同体が崩れ、娯楽も好みも多様化して、みんなで盆踊りを楽しむということは難しくなっている。

さらにまた、地藏盆も、子どもは日ごろから上等のおやつを口にしていただけでなく、何でも家にあるので、おやつや福引だけで子どもを引き付けることは難しくなっている。そして家にはゲームなど、おもしろいものがいっぱいあるので、大人が工夫をこらして子どもを遊ばせようとしても、種が付き、子どももちっとも喜んでくれない。

こうして盆の行事はすべて、かつてのにぎわいを失ってきているように思われる。

## 註

(1)——ここでは京都の北郊として、昭和時代初期まで「京都府愛宕郡」と呼ばれていた地域を主に取り上げた。「愛宕郡」は、現在の「京都市左京区」とすべて一致するわけではないが、重なる部分が多い。嵯峨大覚寺近辺や大津市葛川坂下などは、「愛宕郡」には含まれないが、「愛宕郡」の近辺であり、言及することがある。

(2)——高野澄「京の盆行事」、『京都歳時記2』、小学館、1986年、pp.109-116。

(3)——西京区山田では、「無縁さん」のことを「餓鬼さん」と呼んでいる。

(4)——「オショライムカエ（御精霊迎え）」は、八月一三日の日暮れに行われる。大川筋では川の縁に川原石を積み重ねてカワラボトケ（川原仏）を六体祀り、これに桐の葉か里芋の葉を前において、その上に餅や団子を供えて迎えるところが多い（橋本鉄男『朽木村誌』、朽木村教育委員会、1974年、p.302）。そのようにして精霊迎えをした川地藏・川原仏の前に、15日あるいは16日未明、盆の間に供えた供物を置き、精霊送りをする。「お盆には河原に石を組んで地藏のようなものを作り、そこに供物を供えて精霊送りをするとよく、針畑地域

ではこの地藏を「カワラボトケ」とよび、川岸と地藏との間に石の橋を渡し、三途の川と彼岸を表します」（朽木村史編さん委員会編『朽木村史』、2010年、p.154）。

(5)——「紅葉音頭」、『京都大事典』、淡交社、1984年、p.916。

(6)——福原敏男「洛北における盆の風流灯籠踊り」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集、2004年、p.511。長谷の灯籠踊りについては、中村治「盆の行事」、『洛北岩倉研究』第8号、岩倉の歴史と文化を学ぶ会、2007年、pp.33-34 参照。

(7)——昭和初期には、京都北郊の人のなかには、江州音頭を「さいもん」と呼ぶ人がまだいたという（修学院の鳥居本一馬氏、2007年談）。

(8)——「修学院では、題目踊り、紅葉音頭でさし踊りを踊った後、江州音頭で踊りました」（左京区修学院の中島布美子氏、2007年談）。

(9)——左京区八瀬の石川美智子氏、2008年談。

(10)——八瀬の上野イワ氏は20日ほど、玉置鈴子氏は1ヶ月ほど生家へ戻ったという。自分の着物を婚家で洗濯することはなかなか難しいことであった。2008年談。



---

**要旨**


---

京都北郊における盆の行事は、一族の者が8月7日前後の墓まいりの日に集まる傾向が強かった地域と、盆に集まる傾向が強かった地域が見られるなど、各地域、さらには各家庭で少しずつ異なっていた。一族の者が墓まいりの日に集まる傾向が強かったのは、かつて農村としての性格が強かった地域であり、墓まいりが田仕事の慰労会の意味を持っていたと考えられる。

精霊を接待する期間には長短が見られ、14日だけ接待して、15日早朝に精霊を送ってしまうところも多く見られる。精霊を送るのは16日でも、接待を終えるのは15日というところも見られる。16日まで接待をせずに精霊を送ってしまうのは、若嫁が実家へ「やぶ入り」あるいは「洗濯」と称して帰るのをできるだけ妨げないようという配慮によってであった場合が見られる。

盆踊りは、京都市左京区市原野のハモハ踊り、松ヶ崎の題目踊り、北区西賀茂の六斎念仏などのように、先祖の霊を歓待し、慰め、送るために、村という共同体によって行われた行事であった。しかし戦前には盆踊りはたいてい江州音頭にあわせて踊られるようになり、踊る時期に関しては、精霊を送ってからという場合が多く見られるようになっていた。それは、盆が先祖の霊をまつための期間であるとともに、この世にいる人たちの楽しみの期間でもあったからであろう。

地藏盆は、京都北郊では念仏講と呼ばれる講の人たちが中心となって行った行事であり、大念仏数珠繰り、ご詠歌詠唱が行われていたが、京都の町中では、戦前には子どもを楽しませる行事となっており、京都北郊では昭和30年代～昭和40年代に子ども中心の行事になっていった。

地域社会の消失・核家族化が進んだ最近では、盆の行事はかつてのにぎわいを失っている。そして現代の人は盆の行事をしようと思っても、何をしてよいのかわからなくなり、六道珍皇寺などで教えられる通りに行事を行うようになり、地域の特徴が失われつつある。

【キーワード】 墓参り、精霊、盆踊り、地藏盆、川地藏

※写真は32（玉置すみゑ氏所蔵）、33（山下又七氏所蔵）、35（米沢喜美子所蔵）、36（大西末義氏所蔵）を除き、中村治所蔵。

（大阪府立大学人間社会システム科学研究科，国立歴史民俗博物館研究協力者）

（2017年1月20日受付，2017年6月5日審査終了）